一般社団法人
大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり協議会

アート × エリアマネジメント 検討会報告

アートアーバニズムフレームワーク

21.07.21

contents

01. 導入編　アート×エリアマネジメント検討会の議論の出発点

02. 概念編　アート×エリアマネジメント検討会が提起する大丸有のまちづくり哲学

03. 機能（場）編　まちに必要な機能

04. 仕組み編　アートアーバニズムを推進する仕組みの考え方

05. 今後の進め方　体制の構築とプロジェクトの実践

アート×エリアマネジメント検討会の議論の出発点

課題　東京の国際競争力の向上のために“ビジネスの集積地”である大丸有地区はどのような街づくりをするべきか

貨幣経済から共感経済への時代転換を見据え、才能ある尖った人材が惹き付けられる面白いまちをつくることで、社会や企業のクリエイティビティ／イノベーション力の向上を図りたい

仮説　“ビジネスの集積地”である大丸有地区を“アート活動の集積地”としていくことで、東京の国際競争力は向上するのではないか

MICE 誘致　企業立地の促進

スパイキーな情報の蓄積と発信

様々なチャレンジがまちから展開

まちの変化

- 既存企業が変わる
- ＋ 面白い企業が集まる
- ＋ スタートアップが育つ

アーティストと共に活動展開していく事で

都市の国際競争力の向上

何が国際競争力の向上につながるか？

一つの方向性

世界各地から才能・知識・情報・投資を惹き付ける

惹き付けるためにはどんな要素が必要か？

一つの要素

新しいモノ・コトを生み出す場としての可能性を感じる（クリエイション・イノベーションの場）

クリエイション・イノベーションが起こる条件は？

一つの考え方

異質なモノの結合：多様な考え・価値観・経験が存在

結合の活動が進展していくには？

多様な考えを結合させたり違った見方を提供するクリエイティビティの高い人材の集積と新たな考え方への共感や信頼感

共感経済に導いていくためには？

可能性の一つ

クリエイティビティの高い人材層の一つとしてのアーティストの集積・育成と領域融合型のコミュニティの創出

世界の多くの都市でクリエイティビティの高い人材集積を目指しているが、より解像度を高めてアーティストに着目し、その活動に可能性を見出したい

問い　アート活動の集積地となるための都市の姿や必要条件等を考えていきたい

アート×エリアマネジメント検討会が提起する大丸有のまちづくり哲学

クリエイティビティと共にある“まち” ～多様性を確保しながら問いや異なる視点を発信し、共感による社会・経済へ～

危機に直面している日本の現状に対して、私たちは**“クリエイティブの力”に解を求めたい。**

→その為には、**多様性を確保し、異なる視点を受け止めていく“まち”を作る**ことが重要と考える。

→そのことによって、**世界各地から才能ある人々が惹きつけられ、大丸有の人や企業とつながっていくことで、新たな価値を創造**していく事につながり、その活動の展開・蓄積により**共感経済の発信地**となる事で、大丸有から日本の社会の変革をけん引していくまちづくりを進めていく。

新たなまちづくりのムーブメント=アートアーバニズム

アートアーバニズムとは	**クリエイティブマインドを持って同時代を生きる【アーティスト・クリエイター】と共にこれからのまちづくりを進めていく動きを【アートアーバニズム】と定義**し、**都市空間の創造や都市活動の展開を一体化**させ、常にクリエイティブマインド、アートマインドを持ったまちづくり活動を展開する。

アートアーバニズムの目標

クリエイティブの力で埋もれている価値や社会を良くする価値を生み出し続ける“環境”を創造

01

アーティストの持つ創造性、批評性を新たな価値を生み出す**“まち”のエンジン**として捉え、**クロスジャンルに交流、刺激し合える場**を生み出す。

02

世界トップクラスのビジネス街である**大丸有をアーティストの可能性を押し広げる場**として捉え、**企業とアーティストが相互に高めあえる環境**を目指す。

アートアーバニズム推進に向けて

01

「機能（場）」整備

02

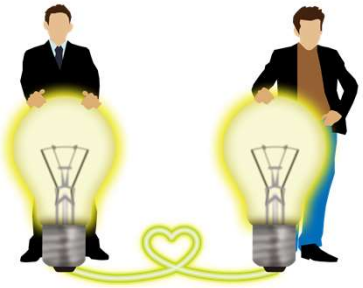
「仕組み」整備

まちに必要な機能

01 インプットと思索の場

様々なインプットやそれを自ら掘り下げていく為の場。多様な人や言説に触れられ、刺激を得る場や機会、得られたインプットを深く掘り下げていく事が出来るアーカイブ等の探求の機能

02 ディスカッションとワークの場



得られたインプットや考えをカタチにしていく機能として、多様な人々とのディスカッションやモノ・コトを作っていく場。アーティストの共同作業の場、企業の技術とアーティストの発想をつなぐラボ、アーティストinオフィス等での滞在制作、広場等の公共空間において仮設的な空間を用意し制作・発信が出来る機能

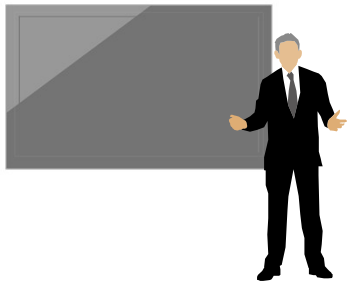
03 見せる場と発信の場

大丸有で生み出された様々なモノ・コトを社会に発信する機能として、まち全体を使って作品等に見られる・触れられる場。国際的な発信拠点（デザインミュージアム、既存ミュージアムの分館）、ビジブルストレージ、まちの公共空間や建物内に点在するギャラリー、アートスペース、カフェや小売店でのアート展示の機能

04 交わる場

常に新しい人を受け入れ、まちとの接点やコミュニティを形成する機能として、多様な人々が日常的に交流出来る、居場所となる場。アーティストとワーカーがカジュアルに交流できるカフェ・バー、アートとビジネスがつながるサロン（アートマーケット、各種イベント）、アーティストのデザインによる屋外空間

05 学び育つ場



継続的に価値を生み出していく機能として、ワーカーやアーティスト・クリエイターが共に学ぶ場。最新の知見やテクノロジーを学べるスクール、将来のビジョンやテクノロジーを議論し示すカンファレンスやクロスジャンルを志向する教育プログラムの展開

機能展開の考え方

機能展開の方針

① **段階的**に取組み展開を考える

② **空間**と**活動**の両方を上手く**つなげながら考える**

③ 様々な**資源**や**可能性**の残る**有楽町地区**から始める

④ **アーティスト・クリエイター**との**協働**の**ディレクション**によって進める

段階的なプロセスと空間の対応のイメージ

まちとアートが近くなる → **まちでアートに触れられる・生み出される** → **まちとアートで社会的なインパクトを生み出す**

現象面

- ○既存のアートイベントがまちに滲み出す
- ○アーティスト・クリエイターにまちを面白がってもらう、遊んでもらう
- ○まちの中にアート作品が出現する
- ○多くの人がアートに触れられる機会が増える
- ○アーティスト・クリエイターの居場所が出来る
- ○まちを使ったアートワークが複数展開される
- ○ビジネスとの接点が強くなる
- ○ワーカー・アーティストが育つ
- ○より多彩なアーティスト・クリエイターが惹きつけられる
- アーティスト・クリエイターとビジネスの対話により社会へのインパクト・ビジネスが継続的に生み出される

空間面

○まちの隙間空間・埋もれている空間の活用 → ○パブリックスペースへの展開（屋外や共用部） → ○建物内での拠点的施設・空間 → ○エリア全体への展開

アートアーバニズムを推進する仕組みの考え方

アートアーバニズムを推進していく為には、様々な活動や空間整備を動かし、支える仕組みが必要となる。
以下のような3つの観点を持つ仕組みを構築していく事が必要。

01

アーティストとビジネスセクターをつなげる

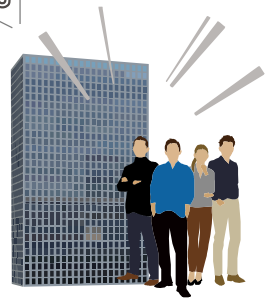
アーティストと企業やワーカーがより近くなっていき、お互いの活動に良い効果、成長が起こるような形、つながりを生み出していく事が重要。

02

アーティストの活躍の幅を広げる・支える

アーティストが活躍する機会を空間的、領域的、主体的に広げていき、日常的に活動を支えるような形を生み出していく事が重要。

03



エリアのリソース活用と面的な展開・発信

エリアにある様々な空間や人、企業と言うリソースをアートアーバニズムの活動に係わらせていくと共に、エリアとして発信していく事が重要。

新たなビジネスを生み出す
インキュベーション的要素

アーティストの活動を支える
アーツカウンシル的要素

まちのリソースを活用しつなげる
エリマネ的要素

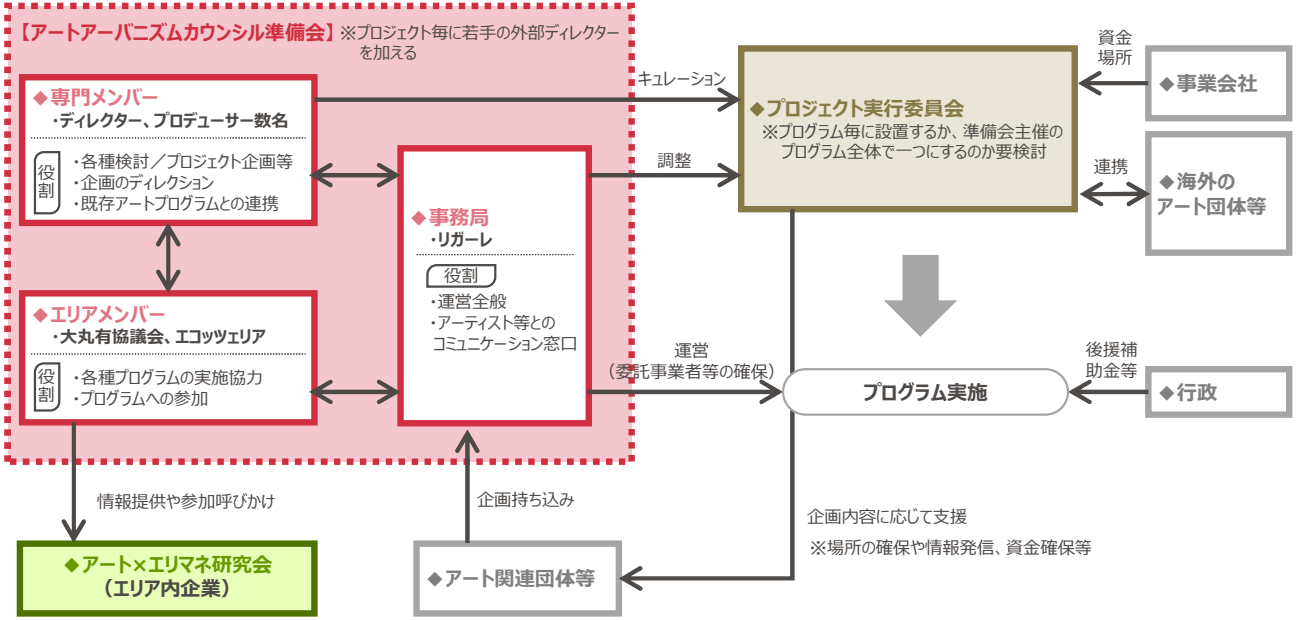
体制	（仮称）アートアーバニズムカウンシル
制度等	支援制度や規制緩和・ファイナンス

アーティストの成長と新たなビジネスの創造を実現するエコシステム形成とそれらを動かしている大丸有と言うエリアの価値向上につなげていく

体制の構築とプロジェクトの実践

アートアーバニズムの体制構築とプロジェクト展開は段階的に進めていく事を想定

準備会の運営



プロジェクト想定

短期	
Project 1	【アートエコシステムリサーチプロジェクト】
Project 2	【まち全体アートスペースプロジェクト】
Project 3	【アート×ビジョンプロジェクト】
Project 4	【アートinオフィスプロジェクト】
中長期	
Project 5	【アーティスト×プレイスメイキングプロジェクト】
Project 6	【フューチャービジョンスクールプロジェクト】
Project 7	【アート×ビジネスラボプロジェクト】

準備会において、事業組織であるカウンシル立上げの各種準備を行いつつ、短期的なプロジェクトを実践していく

「アートアーバニズム」の理念

（補足資料）

「アートアーバニズム」 とは

「アートアーバニズム」 は、「アート」と「アーバニズム」を組み合わせた、新たな造語です。
都市における生活様式の中に「アート」という創造的で感性的な領域が融合することで、**多様・多能な人々の交流から共感を生み出し**、これをベースとして、**持続するクリエイティブな都市活動を展開**するものです。

「アートアーバニズム」とは、アートを都市生活の中に浸透させていく活動ですが、既にある「アートのあるまちづくり」や「アートによるまちの活性化」のように、**単にアート作品やコンテンツを取り込むことだけに留まりません。**
都市における様々な活動にアートが参画し、**まちの日常の場面にアーティストたちがいる**ような活動こそが重要であり、都市を創造性に満ちた、これまでにない場所へと革新する原動力となるのです。

「アートアーバニズム」が、それぞれの場所の状況や課題に応じて展開されることで、従来行われてきた客観的で科学的な課題解決の方法に対し、**共感や感性といった「価値創造」からのアプローチ**を加え、創造とイノベーションを引き起こすことを通じて **「新しい都市の幸せ」 を生み出したい**と考えます。
その担い手は、都市におけるビジネスやライフスタイルに対して「美的感性」で向き合う、限られた領域に縛られない多彩なバックグランドを持った都市のプレーヤーです。

大丸有地区という、日本経済を牽引する大企業が集うグローバルなビジネスセンターから「アートアーバニズム」を提起することは、都市における従来的な活動の限界や、日本的企業経営が直面している課題に対し、**アートが投げかける「異なる視点」に共感して、まちづくりを通じてソリューションを提示していく**ことに他なりません。
「アートアーバニズム」の実践が、**都市に新たなイノベーションを創出する**ことを確信し、**アーティストやクリエイティブな人々と共に有楽町を起点にアクションを始動**します。

（２０２２年３月２日　大丸有まちづくり協議会　シンポジウムＦＡＣＥ **「アートアーバニズム宣言」**）

アートアーバニズムカウンシル準備会：本文章はYURAKUCHO ART URBANISMのSNSメディアであるNote記事の「アートアーバニズムの始まりに寄せて」（中島直人　東京大学大学院 工学系研究科 准教授）より大意抜粋し、一部追記して構成

「アートアーバニズムの始まりに寄せて」

中島直人　東京大学大学院　工学系研究科都市工学専攻　准教授

「アートアーバニズム」は造語である。カタカナ表記はおろか、"art urbanism"という英語の綴りでgoogleで検索してみても、用例はほとんど出てこない、「アート」と「アーバニズム」を組み合わせた言葉である。「アート」はそのまま芸術を指している。計算的、合理的領域に対して、創造的、感性的領域一般を指す広義の芸術である。アーティストや芸術家、あるいは芸術肌と呼ばれるような人たちの立ち振る舞いがイメージされるという意味では、数年前からバズワードとなっているアートシンキングのアートに近いものがある。さて、しかし問題はもう一方の「アーバニズム」である。時々耳にすることはあり、その語感がもたらす意味については一定の共通理解があるように思えるが、「アーバニズムとは何か」と正面から問われると、返答に窮するのではないだろうか。

アメリカを中心とした英語圏諸国では、2000年頃よりアーバニズムという言葉が都市計画や都市デザインの分野で様々な機会に用いられるようになった。発端は、1990年代にアメリカで始まったニューアーバニズム運動である。ニューアーバニズム運動は脱自動車依存社会を目指し、自家用車の爆発的普及以前、あるいは自家用車普及初期のころの、人びとが徒歩や公共交通で暮らしを営む、中心にコミュニティの核となるヒューマンスケールを重視したパブリックスペースと、個々の個性よりも全体の調和を意識した建物が街並みをつくる生き生きとした通りからなる近隣地区を一つのイメージの核としながら、現代の郊外住宅地の刷新、さらには衰退した中心市街地の再生、そして気候変動に伴う地球環境問題に寄与する都市構造への転換等の実践となった。ニューアーバニズム運動は現代の都市計画、都市デザインのメインストリームをかたちづくった。ここで、アーバニズムはかつての近隣、都市の物的環境に留まらない、生活も含めて全体のありかたのことを指していて、その全体を現代の文脈にフィットさせて更新するという意図で、ニューアーバニズムと名乗ったことに注目したい。近代主義の都市計画や都市デザインに対する包括的な批判のために用いられたのがアーバニズムという言葉であった。

以降、都市計画や都市デザイン、あるいは都市のありかたそのものに対する新たなアプローチは、アーバニズムに様々な名詞や形容詞を付加した言葉（〇〇アーバニズム）で表現されるようになった。増加、拡散したアーバニズムの中には、単にヘッドラインとして使用されたものも多かったが、それでもランドスケープアーバニズム、エブリデイアーバニズム、タクティカルアーバニズムのように、都市への既存の介入の仕方についての批判的検討と新しい明確な概念、そして実践的な運動体を備えたものも少なくなく、この20年、都市論は実践面でも思想面でも活況を呈することになった。ニューアーバニズム運動自体は極端な自動車依存社会であるアメリカで始まった運動であるが、その後のアーバニズムは、アメリカ国内に留まらず、グローバルに広がっていった。

こうした状況を踏まえて、批判的検討と明確な概念、そして運動体を伴うアーバニズムとして立ち上がるアートアーバニズムにおいて、改めてアーバニズムという言葉の意味がどのように捉えられるのか、なぜ、アーバニズムという言葉を使うのかを説明しないといけないだろう。筆者は昨年11月に『アーバニスト　魅力ある都市の創生者たち』という共編著を出した。この小書の中で、アーバニズムという言葉の二つの起源と現代のアーバニズムの構想的ビジョンについて説明した。詳しくはそちらを参照してほしいのだが、端的に言えば、アーバニズムは、20世紀初頭のシカゴ派都市社会学に端を発する都市での生活様式という事実概念としての側面と、19世紀末から20世紀初頭にかけての欧州でのユルバニスムに端を発する望ましい都市居住を実現するための技術・思考の体系（その一つが都市計画である）という規範概念としての側面を併せ持ち、その二つの側面の間を自由に移ろっている。

つまり、暮らし手とつくり手の双方から都市を語れるのがアーバニズムである。アーバニズムとは、計画と生活を自由に移ろいながら両者を包含する、都市生活そのものと都市づくりの方法の実践的探究である。
従って、アートアーバニズムとは、アートがその暮らし手にもつくり手にも浸透する状況のことである。「アートのあるまちづくり」や「アートによるまちの活性化」とやや位相を異にするのは、アートは都市に置かれる作品（オブジェクト）やコンテンツというだけでなく、アーバニズムそのものに立ち入り、組み合い、抱き合うということであろう。冒頭で述べたように、アーティストや芸術家、あるいは芸術肌と呼ばれるような人たちの立ち振る舞いから考えると、アートアーバニズムの実践とは、その地域や都市での人々の生活様式の中に創造的で共感をベースにした営みが確かに見出されること、そして、都市づくりの方法において、従来からの客観的、科学的、工学的な課題解決アプローチに加えて、より共感的、感性的、工作的な価値創造アプローチが並走すること、となるだろう。都市づくりの根幹、哲学にアートが参画し、まちの日常の場面にアーティストたちがいる、これが、ビジネス街や商業地、住宅地などそれぞれの地域の文脈に応じて展開されることで、具体的なアートアーバニズムが立ち現れることになる。今回、特にグローバルな都市間競争のプレイヤー、あるいは日本経済の牽引者としての役割を担う大企業が集うビジネス街においてアートアーバニズムが提起されたということは、従来的な都市開発の限界点への問題意識とともに、日本的企業経営に関する都市の側からの問題提起が含まれていると言えるだろう。

ところで、筆者はこのようなアートアーバニズムの発想、構想は、決して新しいものとは考えていない、ということも付け加えておきたい。およそ100年前の1925年10月、関東大震災で大きな被害を受けた東京において、都市美研究会という民間団体が設立された。その設立趣意書には「今や帝都復興を控えて、都市の事業界彌々他事なる秋、タウン・プランナーやシビック・アーティストは勿論、建築家も美術家も、その他いやしくも都市改良家、都市研究家として都市問題に興味と熱意を有せらるる士は漫然書斎や画室に閉じこもっているべきではあるまい」（「都市美研究会の設立」『建築雑誌』、477号、1925年）と書かれていた。実際に集ったのも都市計画や建築の専門家のみならず、ジャーナリスト、美術家、文筆家、哲学者、法学者、統計家などである。翌、1926年10月には実践団体としての体制を整えて、都市美協会に改称した。その都市美協会の機関誌創刊号には、都市美運動は「近代の都市美運動は実にかのタウンプランニングと相俟って市民に対しその揺籃地を約束する切実重要なるシヴィックアートでなければならぬ。」（阪谷芳郎「都市美創刊に際して」『都市美』、1号、1931年）とある。都市美運動の実績や顛末については、拙著『都市美運動　シヴィックアートの都市計画史』に譲りたいが、シヴィックアート＝都市芸術が1919年の都市計画法の制定によって導入されたばかりのタウンプランニング（都市計画）と並置され、その担い手として都市に対する美的感性を持ち合わせた多様なバックグランドの人びとが想定されていた。彼らの発想、構想にアートアーバニズムの素形が自然なかたちで見出されるのは、都市計画自体も始まったばかりであった当時において、そもそも都市づくりを誰がどのような発想で行うのか、について、定まった見解がなかったことを意味している。都市づくりの常識（ひいては都市生活、つまりビジネス街で言えば、働き方や企業のふるまい方）が強固に確立されてしまっている現代において、アートアーバニズムが提起される意義は、関東大震災後の復興の局面と同じくらいに、いやそれよりも大きなものがあるようにも思う。何れにせよ、都市生活や都市づくりは、本来、もっと自由で、多様であっていいのである。

都市美研究会の最初の会合が開催されたのは、麹町区有楽町一丁目一番地、有楽町駅の駅前にあった有楽ビルの一室であった。100年後の今回のアートアーバニズムも、同じ地点から始まろうとしている。個人的には、アートアーバニズムは、新しい都市の幸せを生み出す現代の都市美運動（new civic art movement）であると考えている。